

切採用不相成候間現今不得止情実有之候者ハ可遂
詮議候条至急取調来五月限り可申出候事 五年四月
廿五日陸誌

但外領臺ノ表ハ迫テ規則可相違候事

五年十一月廿八日

第三百七拾九号

今般全國募兵ノ義別紙詔書ノ通り被仰出徵兵令被相
定候條各御趣意ヲ奉體シ未々ニ至ル迄不洩様而違可
致總シテ細大ノ事件ハ陸軍海軍両省へ打合可申此旨
相違候事

但徵兵令及徵募期限ハ迫テ可相違事

徵兵令

朕唯フニ古昔郡縣ノ制全國ノ丁壯ヲ募リ軍國ヲ設ケ
以テ國家ヲ保護ス固ヨリ兵農ノ分ナシ中世以降兵權
武門ニ歸シ兵農始テ分レ遂ニ封建ノ治ヲ成ス戊辰ノ
一新ハ實ニ千有餘年来ノ一大變革ナリ此際ニ當リ海
陸兵制モ亦時ニ從ヒ宜ク制セサルヘカラス今本邦古

昔ノ制ニ基キ海外各國ノ式ヲ斟酌シ全國募兵ノ法ヲ
設ケ國家保護ノ基ヲ立ント欲ス汝百官有司厚ク朕カ
意ヲ體シ普ク之ヲ全國ニ告諭セヨ十一月廿八日

徵兵告諭

我朝上古ノ制海内舉テ兵ナラサルハナシ有事ノ日天
子之カ元帥トナリ丁壯兵役ニ堪エル者ヲ募リ以不服
ヲ征ス彼ヲ解キ家ニ歸レハ農タリエタリ又商賣タリ
固ヨリ彼也ノ雙刀ヲ帶ヒ武士ト稱シ抗顏坐食シ甚シ
キニ至ラハ人ヲ殺シ官其罪ヲ問ハサレ者ノ如キニ非
ス抑神武天皇珍疫ヲ以テ葛城ノ國造トナセシヨリ爾
後軍團ヲ設ケ衛士防人ノ制ヲ定メ神龜天平ノ際ニ至
リ六府二鎮ノ設ケ始テ備ル保元平治以後朝綱頹弛兵
權終ニ武門ノ手ニ墜ケ國ハ封建ノ弊ヲ為シ人ハ兵農

ノ別ヲ為ス降テ後世ニ至リ名分全ク泯没シ其弊勝テ
言フ可カラス然ルニ大政維新列藩版圖ヲ奉還シ辛未
ノ歲ニ及ヒ遠ク郡縣ノ古ニ復ス世襲坐食ノ士ハ其祿
ヲ減シ刀劔ヲ脱スルヲ許シ四民漸ク自由ノ權ヲ得セ
レメントス是レ上下ヲ平均シ人權ヲ齊一ニスル道ニ
シラ則テ兵農ヲ合一ニスル基ナリ是ニ於テ士ハ從前
ノ士ニ非ス民ハ從前ノ民ニアラス均シク皇國一般ノ
民ニシテ國ニ報スルノ道モ固ヨリ其別ナカレヘシ凡
天地ノ間一事一物トシテ稅アラサルハナシ以テ國用
ニ充ツ然ラハ則テ人タルモノ固ヨリ心カテ盡シ國ニ
報セサルハカラス西人之ヲ稱シテ血稅ト云フ其生血
ヲ以テ國ニ報スルノ謂ナリ且ツ國家ニ災害アレハ人
々其災害ノ一分ヲ受サルヲ得ス是故ニ人々心カテ盡

シ國家ノ災害ヲ防クハ則チ自己ノ災害ヲ防クノ基タ
 ルヲ知ルヘシ苟モ國アレハ則チ兵備アリ兵備アレハ
 則チ人々其役ニ就カサルヲ得ス是ニ由テ之ヲ觀レハ
 民兵ノ法タル固ヨリ天然ノ理ニシテ偶然作意ノ法ニ
 非ス然而レテ其制ノ如キハ古今ヲ斟酌シ時ト宜ヲ制
 セサルヘカラス西洋諸國數百年來研究實踐以テ兵制
 ヲ定ム故ヲ以テ其法極メテ精密ナリ然レトモ政體地
 理ノ異ナル悉ク之ヲ用フ可カラス故ニ今其長スル所
 ヲ取り古昔ノ軍制ヲ補ヒ海陸二軍ヲ備ヘ全國士民男
 見二十歳ニ至ル者ハ悉ク兵籍ニ編入シ以テ緩急ノ用
 ニ備フヘシ郷長里正厚ク御趣意ヲ奉シ徵兵令ニ依リ
 民庶ヲ説諭シ論國家保護ノ大本ヲ知ラシムヘキモノ也
 十一月廿八日

徵兵令

緒言

兵ヲ徵スルノ方法ハ國家ノ大典忽ニスヘカラサル
 者ニシテ又之ヲ實踐ニ行フノ難キ固ヨリ言フ俟タ
 ス其法タル古今其制ヲ異ニシ各國其趣ヲ同フセス
 ト雖凡要スルニ一ニ民兵ニ因ラサル者ナシ所謂民
 兵ニ二種アリ曰壯兵曰賦兵是ナリ賦兵ナル者ハ全
 國ノ丁壯ヲシテ兵役ヲ帶ハシメ陸軍ノ兵員ヲ充タ
 シ其内沿海ノ住民舟楫波濤ニ慣レシ者ヲ以テ海軍
 ノ兵員ニ充ツ而シテ壯兵ハ自ラ兵役ヲ望ミ出シ者
 ニシテ服役數年ヲ帶ヒ普ク武技ニ熟練シ一團精兵
 トナリ頗ル其便益ヲ得ル然レ兵後日ニ至リ或ハ弊
 害ヲ生スル無キ能ハス是故ニ壯兵ノ法ヲ廢シ賦兵

一般ノ制度ヲ建シト欲ス竊ニ各國賦兵ノ制ヲ考フ
ルニ大率服役八年乃至二十年ヲ以テ程度トス今
朝實ニ始テ賦兵ノ大典ヲ起サントスルニ方リ兵役
ノ久シキ恐ラクハ人民生活ノ業ヲ妨害シ且ツ當今
ノ國力ニ於テモ關係ナシト謂フヘカラス爰ニ於テ
斟酌其宜ヲ採リ折衷其要ヲ核キ現今實際ニ行フノ
法ヲ定メ題シテ徵兵令ト云フ

徵兵編制ニ概則

徵兵ハ國民ノ年甫メテ二十歳ニ至ル者ヲ徵シ以テ
海陸兩軍ニ充タシムル者ナリ今爰ニ陸軍ヲ大別シ
テ三種トナス其一常備軍其二後備軍其三國民軍是
ナリ又其兵丁ノ身材ニ從ヒ五派ノ兵種ニ區別ス曰
砲兵曰騎兵曰歩兵曰工兵曰輜重兵而シテ各種ノ兵

皆各管鎮臺ノ國郡ヨリ召集シ若干年ノ役ヲ帶ハシ
テ所管鎮臺ニ備ヘ以テ地方ノ守衛ニ充ツ

其一

常備軍ハ本年徵兵ノ抽籤セシ者ヲ以テ編成シ三ケ
年ノ役ヲ帶ハシム者ナリ

第一條 在營中定額ノ日給ヲ與ヘ其他服類共官費
タルヘシ

第二條 強壯ニシテ技藝ニ熟シ行狀正レキ者ハ技
擢シテ近衛兵ニ充ツ

但近衛兵規則別ニ記ス

第三條 士官ノ望アル者ハ願ニ從テ檢査ノ上管下
教導隊ニ入レ學業進歩ノ上ハ上下士官ニ任ス

第四條 技藝ニ熟シ才氣アル者ハ人撰ヲ以テ其隊

ノ下士官ニ任ス

第五條 下士官ニ任セラレタル者ハ更ニ七ケ年以
上ノ役ヲ帯ハシメ後備兵籍ヲ除ク最其人材ニ隨
テ後備軍ノ上下士官ニ任ス

第六條 兵卒ハ總ニ三ケ年ノ服役ヲ有スト雖片大
平閑暇ノ時ハ服役ニケ年以上ニシテ技藝熟練ス
ル者ハ詮議ノ上歸休ヲ許ス

歸休證書規則

年 號	何有縣何郡所住居何族或職業
徵 兵	親名何男或ハ兄叔伯名年甥又厄介
	常備第何番
	入營第何番
	何 某

右入營以來操練ニ勉勵シ其他勤方宜敷候ニ付向キ
何ケ月ノ間休暇申付候最非常ノ節ハ布令次第早々
歸營可致事

年號月日

第何軍營

何 鎮 臺

第一則 銃器服類屬具共保存ノ手當ヲナシ姓名番
號ヲ記シ一ツ書ニシテ給養士官ニ引渡シ置クヘ
シ

第二則 歸休中ト雖モ在營ノ心得ヲ以テ他出スル
モ其管内ツ出ルヲ禁ス

第三則 歸休中萬一病氣ニテ期限通り歸營相成リ
難キ者ハ醫師ノ證書及ヒ府縣ノ証印ヲ以テ届出
ヘシ若又父母ノ重病并死没等止ムコト得サル事故
出來ノ者ハ醫師ノ證書并其事故ニ係ハル親族及
ヒ府縣ノ証印ヲ以テ願出ル者ハ詮議ノ上日數ヲ
定メ之ヲ許ス

其二

後備軍ハ常備軍三ヶ年ノ役ヲ勤メ終リシ者ヲ以テ

編成ニ常ニ家居ニ在業ヲ營マシム復之ヲ別テ二
種トナス曰第一後備軍曰第二後備軍是ナリ

第一後備軍ハ二ヶ年ノ役ヲ帯ハシメ戰時ニ當リテ

ハ直ニ召集シ常備軍ニ加ヘ其負ヲ克具セシム可
キヲ以テ一歳ニ一度屯營ニ召集シ其技ヲ復習セシ
ムル者ナリ

第一條 屯營中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ其他服類共官費
タルヘシ

第二條 技藝ニ熟シ才氣アル者ハ服役中同軍ノ下
士官ニ任ス

第三條 復習ヲ終ヘ歸郷ノ節ハ銃器服類屬具共保
存ノ手當ヲシ姓名番號ヲ記シ一ツ書ニシテ給養
士官ニ引渡シ置クヘシ

第四條 服役中他出スルモ管内ヲ出ルヲ禁ス若シ止ムヲ得サル事故アル時ハ其鎮臺ニ願出免許ヲ請フヘシ最復習期限ニ妨碍スヘカラス

第二後備軍ハ第一後備軍ニケ年ノ役ヲ帯ハシメ全國大擧ノ時ニ當リ召集スヘキ兵タルヲ以テ平時屯營召集ヲ要セサル者ナリ

但服役中自己ノ管内ヲ出ル時ハ出入并ニ其往ク先キ共詳細ニ其鎮臺ニ届出ツヘシ最第一後備軍非常屯集ノ節ハ早々管内ニ歸ルヘシ

總テ徵兵ノ服役期限ニ滿ル者ハ雖モ戰時ハ勿論非常ノ事故アル時ハ其期ヲ延サ、ルヲ得ス國民軍ハ常備後備兩軍ノ外ニ全國ノ男兒十七歳ヨリ四十歳迄ノ者悉ク兵籍ニ載セ置テ全國大擧

ノ役アルニ方リ均レク隊伍ニ編入ニ以テ管内ノ守衛ニ供スル者ナリ

第一章 徵兵官負並職掌

第一條 徵兵使 陸軍中佐或ハ少佐ノ内一人之ニ任シ府縣ニ出張シ知事令參事ト識シ徵兵ノ諸務ヲ總管ス但時宜ニ由リテハ副使ヲ遣ハシ代理セシム

第二條 徵兵副使 陸軍大中少尉ヲ以テ之ニ任ス人員ハ巡四府縣ノ大小ニ應シ正使ヲ佐テ議官及ニ一等軍醫副以下ノ醫官ト共ニ郡邑ヲ巡行シ徵

兵規則内ノ事件ヲ決議シ抽籤等ノ事ヲ掌ル
第三條 書記 陸軍中少録ヲ以テ之ニ任ス人員ハ二人乃至三人トス徵兵使ノ諸記録ヲ掌ル

第四條 議長 府縣ノ知事令參事ノ内一人之ニ任ス徵兵ノ事ニ付審斷判決ノ事ヲ掌ル

第五條 議官 典事屬ノ内ヲ以テ之ニ任ス人負ハ
徵兵副使ノ數ニ准ス徵兵副使ト共ニ郡邑ヲ巡行
シ職掌議長ニ亞ク

第六條 議員 戸長或ハ副戸長ヲ以テ之ニ任ス人
負ハ大抵其検査スル所ノ區數ニ倍ス最時宜ニ由
テ増減レ公文ヲ布達シ民情ヲ上伸スル事ヲ掌ル

第七條 二等軍監一人 徵兵使ニ從ヒ兵丁ノ身
材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査スル事ヲ掌ル

第八條 二等軍監副ヨリ試補ニ至ル 徵兵副使
ニ從ヒ郡邑ヲ巡廻ス職掌二等軍監ニ同シ人負ハ
徵兵副使ノ數ニ準ス

第九條 備監 府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人負ハ其
検査スル所ノ區數ニ準シ軍監ニ從ヒ地質ニ生ス

ル所ノ疾病ヲ上告レ兼テ史生ヲ助ケ検査ノ事件
ヲ記録ス

第十條 史生 府縣ノ撰ヲ以テ之ヲ命ス人負適宜
ニ任スト雖モ大抵議長ノ數ニ準シ検査抽籤中ノ
件々ヲ記録スル事ヲ掌ル

第十一條 徵兵使長ニ議長二等軍監ハ各府縣ニ滯
在シ徵兵ニ關スル諸務ヲ總裁ス書記之ニ屬ス副
使議官一等軍監副以下備監共組ヲ立各區ニ分行
スル者トス

第十二條 徵兵諸官ハ一歳ノ徵兵事務ヲ竣レハ悉
ク職ヲ解ク者トス

第二章 徵兵使巡行并検査前事務

第一條 徵兵使巡行ハ二月十五日ヨリ始ノ第一章

中第一條 第二條 = 揭示シタル陸軍武官差 = 軍醫
等一行トナリ府縣 = 出張シ地方ノ諸官ト合議シ
徴兵署ヲ設ケ常備ノ定員ヲ充タスコリ後備軍
ノ出入免役願出ノ者等總テ徴兵ニ關スル事務ヲ
裁判ス其出務ノ時間ハ大抵本省ニ準スト雖モ速
ニ事務ヲ竣ルヲ要スルヲ以テ時刻ヲ變易スルハ
時宜ニ由ルヘシ

第二條 代人料上納兵役免除ヲ願出シ者ハ第六章
中ノ第十五條第十六條 = 揭示シタル書面ヲ以テ
篤ト取ルニ聞届ノ上連名簿中本人姓名ノ上ニ徴
兵署免役ノ檢印ヲ押スヘシ

第三條 府縣ヨリ陸軍省ヘ差出シタル徴兵連名簿
ヲ照シ當府縣ニ於テ當年徴兵幾人其内兵種相當

ノ人負及ニ補充ノ員數ヲ算定シ又免役連名簿并
ニ箇條書取ルニ中ニ就テ學徒ハ學校ノ証書及ニ
科目免許書等點檢ノ上紛レナキ者ハ姓名ノ上ニ
徴兵書免役ノ檢印ヲ押スヘシ

第四條 徴兵ニ採ルヘキ者ハ皆軍人ヲ以テ處置ス
故ニ免役規則ニ適スル者ヲ除クノ外如何ナル苦
情之レアルトモ決シテ聞届クヘカラス最戸長ヨ
リ故障詳細書ヲ以テ申立ル者ハ此限ニアラス

第三章 常備兵免役規則
第一條 身ノ丈々五尺一寸尺曲未滿者
第二條 羸弱ニシテ宿病及ニ不具等ニテ兵役ニ堪
ハサル者

第三條 官省府縣ニ奉職ノ者

但等外ニ此例ニ奉ス

第四條 海陸軍ノ生徒トナリ兵學寮ニアル者

第五條 文部工部閣拓其他ノ公塾ニ學ビタル專門生徒及ヒ洋行修業ノ者并ニ鑿術馬鑿術ヲ學ブ者

但教官ノ証書并ニ何等科目ノ免許書アル者科目ノ等未定

第六條 一家ノ主人タル者

第七條 嗣子并ニ承祖ノ孫

第八條 獨子獨孫

第九條 罪科アル者

但徒以上ノ刑ヲ蒙リタル者六年十二月改五アリ

第十條 父兄存在スレバ病氣若クハ事故アリテ父兄ニ代リ家ヲ治ル者

第十一條 養子

但約束ノミニテ未タ實家ニアル者ハ此例ニ非ス

第十二條 徵兵在役中ノ兄弟タル者

第四章 徵兵検査

第一條 徵兵検査定日ハ三日以前ニ徵兵署ヨリ郡

々各區へ布達シ區括リ日割リヲ以テ一日幾人ト定メ戸長副戸長ノ内順序ニ召連出ヘシ

第二條 徵兵使巡行ノ節ニ至レハ府縣廳ヨリ各區

ニ在式雛形ノ如ク罫紙ヲ渡シ本年徵兵タル者ニ一枚宛渡シ朱書ニテ示シタル如ク姓名産國住居

親ノ名或ハ兄叔伯總テ育シ者ノ名本年月日誕生年辨月日其他罫紙題辨ノ下ニ父母ノ存亡ハ勿論

同居ノ祖父母兄弟妻子及ハ氏神宗門等書載セ人
 別表ト稱ハ検査ノ時各個持参ニ軍醫ニ渡スヘ
 區々ニ渡シタル蘇敵ノ殘リハ徵兵事務竣ルノ
 後府縣廳ヘ返納スヘシ

人別表

親	男	職業	年 月 日	名	歳	誕生	氏
						年月日	
<small>何郡所生 何府縣何族或ハ職業</small> <small>親名何男或ハ叔伯名等又凡介</small>							

妻子	兄弟	祖	女	男	女	男	女
			女	男	女	男	女
			宗		神		
			門				

但産國ト當時ノ貫属府縣ト異ナル者ハ表首何
 郡所産ト書スルノ上ニ其産國ノ府縣ヲ加ヘ若
 又寄留スル所ニ於テ服役スル者ハ何郡所生ト
 書スルノ代リニ其寄留スル府縣及何郡所寄留
 ト書スヘシ

第三條 徵兵ノ躰質ヲ検査スル時ハ徵兵副使議官
 各一名列坐検査ノ件々ハ都テ軍醫ノ專任タルヘ

第四條 徵兵検査ノ席ニ出ル時ハ各個人別表ヲ所持シ鑿官ニ渡ス鑿官ハ書記ヲ掌トル者ニ渡シ姓名ヲ検査簿ニ留メシノ身幹骨格検査ノ件々ヲ記セシム

第五條 検査呼出シノ時ニ病氣ニテ出席成リ難キ者ハ其家ニ就キ診断ノ上一時或ハ因著等ノ病質ヲ糺シ一時病氣ノ者ハ翌年ノ徵兵ニ廻シ因著ノ者ハ免役規則宿病ノ者同断タルヘシ

第六條 検査呼出シノ時ニ父母ノ喪ニ罹リ未タ三週間ヲ過キサル者或ハ父母ノ重病及ヒ一家ノ安危ニ係リ一時已ムテ得サル事故出来ノ者ハ夫々詳細書及ヒ戸長ノ証印ヲ以テ願出ル者ハ翌年ノ

徵兵ニ廻ス可シ

但翌年ニ廻スヘキ徵兵ハ府縣毎ニ別簿ニ認メ徵兵署ノ檢印ヲ押シ府縣廳ヘ留置キ當冬ノ徵兵連名簿ト共ニ陸軍省ヘ差出スヘシ

第七條 徵兵署ニ隔リタル郡邑ハ副使一等副以下ノ軍醫議官及ヒ史生一行トナリ郡邑高ニ應ヒ分界ヲ立テ組ヲ分テ巡廻セシメ相應ノ場所ニ於テ假ニ検査場ヲ設ケ其式本署ニ具ナルヲナシ

第五章 抽籤ニ関スル試檢

第一條 身幹検査終リタル後検査簿ヲ案シ兵役ニ適スヘキ者ヲ點檢シ府縣毎ニ常備抽籤召集ノ為メ其定日及ヒ場所共三日以前ニ布達スヘシ

第二條 抽籤ノ場所ハ府縣下或ハ管内便宜ノ地ヲ

以テス

第三條 抽籤ヲ五種ニ分テ其身材ニ從ヒ步騎砲工
輜ノ籤ヲ抽カシム

第四條 本年常備ノ缺員ヲ補フ為メ補充兵トシテ
一ケ年ヲ期トシ常備一ケ年ノ徵員二分ノ一以内
ノ負數ヲ常備籤ト同時ニ抽カシム

第五條 抽籤ノ法ハ籤丁ヲ調ヘ左式雜形ノ如ク籤
札ニ其負數丈ケノ番號ヲ記シ籤箱ニ納レ籤簿方
ノ側ニ置キ區分ケ或ハ郡分ケニシテ混雜セサル
様一人宛之ヲ抽カシメ籤簿方ハ始終籤簿ニ對シ抽
籤ノ正不正ヲ檢シ抽キ擧レハ其番號ヲ自ラ高聲
ニ唱ヘシメ籤札ヲ受取り籤簿ニ姓名番號ヲ記シ
復當人ニ返ス

假令ハ籤丁五百人ナルキハ第一番ヨリ五百番
迄ノ札ヲ納シ之ヲ抽カシム本年常備定員二百
人補充百人ナルキハ二百番迄ノ籤ヲ抽キシ者
ヲ常備トナシ二百一番ヨリ三百番迄ノ籤ヲ抽
キシ者ヲ補充トシ其餘ヲ以落籤トス

(步) (騎) (砲) (工) (輜)

何 番

籤札ハ厚紙縱横三ツ或ハ
四ツ切ニシテ四ツ折ニナ
シ中分ヲ捻ル

第六條 抽籤當日病氣ノ者ハ其親或ハ親屬時トシ

ヲハ戸長ヲ以テ代人トス

第七條 籤丁ニ當府縣ニ於テ常備幾人補充幾人籤丁ノ總負幾人ト抽籤以前ニ申聞セ置クヘシ

第八條 抽籤終リ常備及ニ補充ニ當リタル者ハ書翰往復筆術等出來得ルヤ否ヤヲ試ムヘシ

第九條 書翰及ニ算術ノ試験ハ史生ノ内算術ヲ心得居ル者ヲ撰任シ試験場ヲ設ケ上下二等ニ區別ス其任法ハ二三行ノ翰讀ヲ讀ミ易キ様三四枚認メ并ニ算露盤等備ヘ置キ一人ツ、算筆ノ内出來得ルヤ否ヤヲ問ヒ出來得ル者ニハ右翰讀ヲ讀マシメ無滞讀ミ得ル者ヲ上等トシ二字以上誤ル者ヲ下等トス算ハ除法(即ハ算見一)以上出來得ル者ヲ上等トナシ其以下ヲ下等トナス

第十條 試験全ク終ルノ後籤簿ヲ照シ人別表ト引合セ姓名住居其他左式雛形ノ如ク厚紙長サ五寸幅三寸ノ罫紙ニ陸軍徴兵署ト題シタル割符ニ書載セ籤簿ニ引合セ割印ヲナシ番號并ニ服役年期ヲ書加ヘ籤簿頭ニ呼出シ籤札ヲ出サシメ相違ナキ者ハ籤札ト右番號割符ト引替ヘ相渡シ第六條ノ第一條ニ掲示シタル如ク各個入營イマス

番號割符

何府縣何郡所住居何族或職業

親名何男或兄叔伯名第甥又厄介

割印

年 陸軍

各種

水戸縣

算術

日	月	辨
署		徴兵
右何鎮臺常備軍三ヶ年服役申付候事		隊辨 第何番
		何某

補充義ヲ抽キシ者ハ
 右何鎮臺補充兵一ヶ年
 服役申付候事

第一後備軍ニ入ル者ハ
 右何鎮臺第一後備軍
 二ヶ年服役申付候事

第二後備軍ニ入ル者ハ
 右何鎮臺第二後備軍
 二ヶ年服役申付候事

第十一條 補充役ヲ命セラレタル者ハ其家ニ歸居
 シ落籤ノ者ト異ナルヲナシ常備缺員ノ節ハ其鎮
 臺ヨリ籤順ニ布達シ何時ニモ入營ナサレムヘ
 キニ付服役中ハ自分ノ管内ヲ出ルヲ禁ス
 但服役ヲ命セラレタル其日ヨリ一ヶ年目ノ其
 日迄ニ常備入營ヲ命セラレサル者ハ其役除籍
 ト心得ヘシ

第十二條 補充ヨリ常備軍ニ命セラレタル者ハ天
 張り補充抽籤其日ヨリ三ヶ年ノ期ヲ保ツヘシ

第十三條 本年常備軍満期ノ者ハ出營ノ日從備籤
 フ抽カレシメ以テ番隊ノ順序ヲ定ム而シテ常備役

二外
此
類
也

ノ番籍割符、満期ノ捺印ヲ押シ後備軍ノ番籍割符ヲ相渡スヘシ

但當日病氣ノモ、ハ其戦友ヲシラ之ヲ抽カシ

ム

第十四條 本年第一後備軍満期ノ者ハ第二後備軍

ノ籍ニ入ルヘキヲ以テ第二回此營復習ノ節第一

後備役ノ番籍割符ニ満期ノ捺印ヲ押シ第二後備

軍ノ番籍割符ヲ相渡スヘシ

但病氣ニテ不参ノ者ハ戦友ニ之ヲ渡ス

第十五條 第二後備軍ノ番籍割符ヲ定ケニケ年目

ノ其日ヨリ第二後備軍ノ籍ヲ除セラレシ者ト心

得ヘシ

第十六條 本年各府縣ニ於テ徵兵事件全ク竣ルノ

後徵スル所ノ兵員ヲ精算シ兵種ヲ分テ五式雜形ノ如ク紙紙、各個持参致シタル徵兵人別表ヲ寫シ取リ身辨検査簿算筆試驗簿及ヒ籤番籍ヨリ額額其他題籍ノ下ニ悉ク書載セ人別明細連名簿ヲ認メ常備補充ヲ區別レ一府縣ニ纏メ各二部ヲ作り陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺ニ差出スヘシ

但鎮臺一渡ス人別明細連名簿、籤簿相添ヘ四月十五日迄ニ差出スヘシ

親或兄叔伯名 本人姓名	何	某	同	同
産國				
住所				
誕生				
族親				

大
文
類
典

心
系
果

第十七條 本年徵兵出席ノ名簿ヨリ代人料上納名簿免役名簿其他種々ノ願書及ニ届書區長戸長ノ取調ニ証書總ニ徵兵ニ關スル書類ハ一切人別明細人名簿ト共ニ陸軍省ニ差出スヘシ

第六章 徵兵雜則并扱方

第一條 常備籤ヲ抽キクル徵兵ハ四月廿日ヨリ五月一日迄ニ入營致スヘシ其營所迄ハ府縣毎ニ區括リニシテ戸長副戸長ノ内百連レ出ヘシ最營所ニラハ籤ノ番號ヲ目的ニ入營ナサレムヘキニ付組歸ナキ者ハ銘々勝手ニ入營致スヘシ夫迄ノ入費ハ總テ府縣ニ辨スヘシ若シ事故アリ入營遲緩ニ及フハ其事故ヲ生スル所ヨリ辨スヘシ但書中區括リト稱スル者ハ區ノ大小人口ノ疎

密ニ由リニ區或ハ三四區括リ總テ府縣ノ便利ニ從フ

第二條 籤ノ番號ハ服役中ノ目的タルヘキヲ以テ各個丁寧ニ所持致スヘシ

第三條 病氣或ハ事故出來期限通り入營相成リ難キ者ハ其設詳細ニ書誌ノ區長及ニ其病氣事故ニ係リタル者ノ証印ヲ以テ至急ニ其鎮臺ニ届出ツヘシ

第四條 常備軍服役在營中其身元轉居スルハ其隊ノ軍曹ニ届出ツヘシ歸休中ノ者ハ第九條第一後備服役中轉居ノ届同斷タルヘシ最其隊ノ軍曹ニ届出ツヘシ

第五條 常備軍服役中歸休郷里ニ在テ死没スル者

此類

ハ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ニシ者ヨリ當人營所ノ士官及ニ其鎮臺へ届出ヘシ

第六條 常備軍在營中病氣ノ者ハ軍醫ノ診斷ヲ以テ病院へ入レ治療セシノ其上ニテ兵役ニ堪ヘ難キ者ハ兵籍ヲ除スヘシ最歸縣迄ノ旅費ハ定則ニ照準シ賜ルヘシ

第七條 父母ノ重病或ハ非常ノ事故出來一時止ヲ得ナル歸省ヲ願フ者ハ其親或ハ親族ノ者ヨリ府縣廳ノ稟書証印ヲ以テ所管ノ鎮臺へ願出ルニ於テハ詮議ヲ遂ク許可スヘシ尤滞郷日數ハ往來ヲ除クノ外二週間ヨリ長カルヘカラス但旅費ハ往來共自辨タルヘシ

願書按文

何所縣何郡何村何族或職

何 某

右私^親何年ヨリ御臺常備軍入營罷在候處父

或ハ母何某病氣大切云々ニ付或ハ何々ノ事故出

來ニ付何卒御規則ノ日數御暇被 仰付度奉願上

候以上

年 月 日

何 某 印

何 鎮 臺

御 中

前書ノ通相違無御座候以上

同日

何 府 縣 印

第八條 第一後備軍ノ復習期限ハ年々十日以前ニ

其鎮臺ヨリ市達ニ旅費等ハ陸軍兵卒旅費定則ニ

照準シ里程ニ應ニ相渡スヘシ若シ病氣或ハ事故

大改類典

出來ノ者ハ第三條ノ通届出ヘシ

第九條 後備軍服役中轉居スル片ハ受送り雙方共
戸長ノ姓名奥書証印ヲ以テ其鎮臺ヘ届出ツヘシ
但其管内ヲ出ルヲ禁ス

届書按文

私儀此度何郡所へ轉居住候間此役御届申上候以
上

年 月 日

年 月 日 役
備軍管何番

何府縣何郡所住何族或職業

何 鎮 臺

御 中

前書之通相違無御座候以上

同 日

送付何郡所戸長

何 某 印

同 日

受付何郡所戸長

何 某 印

第十條 後備軍服役中ノ者若シ官省府縣コリ登用
セト欲スル時ハ其管廳ヨリ其鎮臺へ掛合フヘ
シ

第十一條 後備軍服役中死役ハ親或ハ兄叔伯ニテ
モ育ミシ者ヨリ届出ヘシ若シ又後備軍服役中國
禁ヲ犯シ或ハ脱走等ノ者アル片ハ其府縣廳ヨリ
簡條書ヲ以テ陸軍省及ヒ所管ノ鎮臺ヘ届出ツヘ
シ

第十二條 全國ノ男兒齡十七歳ヨリ國民軍籍入
リ外寇或ハ有事ノ時ニ當リ隊伍ニ編入シ管内守
衛トナルヘキヲ以テ前年十六歳ノ冬十一月十日
迄ニ其親或ハ兄叔伯ニテモ育ミシ者ヨリ戸長ヘ
左式ノ通り届出ヘシ尤一家ノ主人タル者ハ自分

ヨリ届出ヘレ戸長之ヲ取調ヘ十一月廿日迄ニ所
轄ノ區ハ差出シ區長點檢ノ上十一月三十日ヲ限
リ區括リニシテ府縣廳ヘ差出シ翌年ノ成丁簿ニ
載セ置クヘシ

男兒十六歳ニ滿レハ其年ノ冬十一月十日迄ニ
各個戸長ヘ左式ノ書付ヲ以テ届出ヘキ様府縣
廳ヨリ郡々村々ニ至ル迄洩レサル様布達致シ
置クヘシ

私^{何男}某儀明年十七歳ニ相成候間此段御届申
上候以上

年拜月日

何郡所在何姓或職業

何 某 印

戸長

何某殿

戸長ハ十一月廿日迄ニ右届書ノ姓名ヲ一纏
ノ左ノ通區長ヘ届出ヘシ

當^{何村}即ニ於テ明年十七歳ニ相成候者別冊ノ通
幾名御座候此段御届申上候也

年拜月日

何郡所在何姓

何 某 印

第何大區

御中

區長ハ十一月三十日迄ニ戸長ヨリノ届書ヲ一纏
ニシテ左ノ通り府縣ノ戸籍掛リヘ届出ヘシ
當區内ニ於テ明年十七歳ニ相成候者別冊ノ通
リ戸長ヨリ届出候間及進達候也

年拜月日

何郡所在何大區長

何 某 印

何府縣戸籍掛

御中

第十三條 男兒二十歳ニ至レハ兵役ニ就クヘキヲ以テ毎年十二月廿五日迄ニ府縣廳ニ於テ十九歳ノ者ヲ調ヘ徵兵連名簿ニ載スル事トス是故ニ十九歳ノ者ハ其年ノ十一月十日迄ニ前條十七歳ノ届式ノ如ク戸長ヘ届出テ戸長十一月廿日迄ニ成丁簿ヲ照シ現人ニ引合セ其内免役ニ適スル者ハ萬ト取調ヘ夫々箇條書相添匠長ヘ差出シ匠長ハ十一月三十日迄ニ區括リニシテ証印シ府縣廳ヘ差出スヘニ府縣廳之ヲ點檢シ徵兵連名簿ニ載セ十二月廿五日迄ニ陸軍省ヘ差出スヘシ尤免役ニ適スル者ハ區々ヨリ差出シタル免役箇條書ヲ取糾シ免役連名簿ヲ認メ各個條ヲ詳細ニ書載セ徵

兵連名簿ト共ニ差出スヘシ其中官員ハ其勤仕スル官廳ノ名及ヒ等級學徒ハ夫々其修業スル所ノ學校ヘ掛合ニ教官ノ証書及ヒ科目免許書等取寄セ置キ徵兵使巡行ノ日差出スヘシ若シ右証書科日書等ノ者ハ正月中ニ呼返シ置クヘシ尤洋行修業ノ者ハ此例ニアラス

戸長届書按文

當^{何郡何村}於テ當年十九歳ニ相成リ候者別冊ノ通り幾名其内免役御規則ニ當リ候者幾名御座候ニ付夫々箇條書相添ヘ此段御届申上候以上

年辨月日

何^{何郡何村}某 印

第何大區

御中

區長進達書按文

當區内ニ於テ當年十九歳ニ相成候者別冊ノ通
リ幾名其内免役御規則ニ當リ候者幾名夫々箇
條書差添ヘ戸長ヨリ届出候間篤ト取調候處相
違無御座候間及進達候也

年號月日

何府所寄何大區長

何 某 印

何府縣戶籍掛

御 中

第十四條 寄留スル者ノ子弟及ヒ厄介タル者ハ現
今寄留スル府縣ノ兵籍ニ入ルヘシ
但本籍ニ歸リ兵役ヲ勤ノト欲スル者ハ十九
歳十一月十日迄ニ此段ヲ戸長ニ届出候間ヨリノ
送り書ヲ以テ本籍ニ歸ルヘシ

第十五條 本年徵兵ニ當リ自己ノ便宜ニ由リ代人
料金二百七十圓上納願出ル者ハ常備後備兩軍共
之ヲ免ス

免役上納金ハ區長ニ差出シ府縣廳纏ノ五月中
ニ陸軍省ニ相納ムヘシ

第十六條 免役ヲ願出ル者ハ其親或ハ親族ノ者ヨ
リ徵兵使逆行徵兵検査以前左ノ願書ヲ認メ戸長
ノ奥書証印ヲ以テ區長ニ差出スヘシ

其親或ハ親族ノ者願書ハ戸長奥書按文

私^{何府所寄}何某儀當年二十歳ニ相成服役可仕等ノ

處家事差文ヲ有之ニ付代人料金二百七十圓上
納仕候間何卒常備後備兩軍共御差除被下度奉
願上候以上

年號月日

何部何郡何縣何村何庄何屋何

何 某 印

陸軍徵兵署

御 中

前書願出ノ通相違無御座候以上

同日

何部何長

何 某 印

區長進達書按文

當區内免役願出候者幾名戸長ヨリ奥書証印ヲ以テ別冊ノ通り差出候間精細吟味仕候處毛頭不都合ノ筋無御座候間及進達候也

年號月日

何部何郡何縣何村何庄何屋何

何 某 印

陸軍徵兵署

御 中

第十七條 總テ區長戸長ノ取扱フヘキ事件未タ區

長ヲ差置レサル所柄ハ區長戸長ニ相當スル從前

ノ莊屋以上ノ者ヲ以テ之ニ代フヘシ

第十八條 徵兵ニ關スル事件ニ付年齒及父母兄弟

ノ有無又ハ虛病其他詐偽スル者ハ官ヲ欺罔スル

ノ罪若又戸長或ハ區長取調ヘ証印ノ上ハ其証印

ヲナセシ官吏ハ粗漏ノ罪尚又徵兵ノ欺妄ヲ隱匿

スル者ハ其罪最重カルヘシ右孰レモ新律綱領ニ

照準シ其罪ヲ紀メ可キナリ

徵兵令附録

六管鎮臺徵兵式

第一軍管東京鎮臺常備

步兵 三聯隊 騎兵 二大隊

砲兵 四小隊 工兵 三小隊

輜重兵 一隊 海岸砲兵 三隊

人負七千四百拾人

内一ヶ年徵負二千三百八十人

管下府縣

東京 神奈川 埼玉

入間 足柄 靜岡

山梨 印旛 木更津

新治 茨城 宇都宮

新潟 柏崎 群馬

榎本 長野 相川

府一縣十七

高七百三十七万石

第二軍管仙臺鎮臺常備

歩兵 二聯隊 騎兵 一大隊

砲兵 二小隊 工兵 一小隊

輜重兵 一隊 海岸砲兵 一隊

人負四千四百六十人

内一ヶ年徵負一千四百八十六人

管下諸縣

宮城 磐前 福島

水澤 若松 青森

岩手 秋田 酒田

山形 置賜

縣十一

高四百二十二万石

第三軍管名古屋鎮臺常備

步兵 二聯隊 砲兵 二小隊
工兵 一小隊 輜重兵 一小隊

人員四千二百六十人
內一々年徵負千四百二十人

管下諸縣

岐阜 額田 濱松
菟摩 愛知 石川
新川 尺羽
縣八

高四百八十二万石

第四軍管大坂鎮臺常備

步兵 三聯隊 砲兵 四小隊
工兵 二小隊 輜重兵 一小隊

海岸砲兵 二隊

人員六千七百人

內一々年徵負二千二百三十四人

管下府縣

大坂 兵庫 堺
和歌山 奈良 京都
滋賀 敦賀 三重
度會 飾磨 豊岡
鳥取 北條 岡山

府二縣十三

高六百二十九万石

第五軍管廣島鎮臺常備

步兵 二聯隊 砲兵 二小隊

工 兵 一小隊 輜重兵 一隊

海岸砲兵 一隊

人員四千三百四十人

內一ヶ年徵負一千四百四十六人

管下諸縣

廣 島 小 田 島 根

濱 田 山 口 香 川

名 東 高 知 神 山

石 鐵

縣 十

高四百。四万石

第六軍管熊本鎮臺常備

步 兵 二聯隊 砲 兵 四小隊

工 兵 二小隊 輜重兵 一隊

海岸砲兵 二隊

人員四千七百八十人

內一ヶ年徵負一千五百九十四人

管下諸縣

白 川 八 代 鹿 兒 島

都 城 美 々 津 大 分

小 倉 福 岡 三 瀨

佐 賀 長 崎

縣 十 一

高四百四十八万石

總計

人員 三万千六百八十人

正身

内一ヶ年徴負一萬。五百六十人

府三縣七十

石高三千二百二十二万石

以上六鎮ヲ以テ全國兵備ヲ管ニ所屬ノ府縣ヨリ
 毎歲ノ兵負ヲ徴募シ以テ管内ノ守衛ニ充ツ而シ
 テ沿海ノ丁壯舟楫波濤ニ慣レル者ヲ以テ海軍
 ノ兵負ヲ充タルニ蓋此書ハ陸軍ヲ限ル

全國徴兵表

七年	一萬。五百六十	第 二	二萬千二百二十	此兵ハ漸ク年月ヲ經ルヲ以テ緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ二トス
歲次	毎歲徴數	合數		

初年	一萬。五百六十	兵		
二年	一萬。五百六十	備	三萬千六百八十	此兵常ニ充足ヲ要スルヲ以テ缺損アル毎ニ補充兵ヲ以テ之ヲ補フ
三年	一萬。五百六十	常		
四年	一萬。五百六十	備 後	二萬千二百二十	緩急ノ用ニ供ス可キ者五分ノ四トス
五年	一萬。五百六十	第 一		
六年	一萬。五百六十	備 後	八千四百四十八	一萬六千八百九十六

常備歩兵ニ付各種兵負ノ比較

大文類

巴 兵 果

歩兵 二萬六千八百八十人

凡七十五分ノ一 騎兵 三百六十人

凡十二分ノ一 砲兵 二千六百六十人

凡二十二分ノ一 工兵 千二百人

凡七十五分ノ一 輜重兵 三百六十人

凡三十七分ノ一 海岸砲兵 七百二十人

合計 三万六千六百八十人

各種常備兵 一々年ノ徵負

歩 八千九百六十人

騎 百二十人

砲 七百二十人

工 四百人

輜重 百二十人

海岸砲

二百四十人

合計 一萬〇五百六十人

補充兵トシテ常備一々年徵負五分ノ二中ニ就テ

常備騎兵ハ之ヲ他種ノ兵員ニ比スレハ最少ニシ

テ近衛ニ模倣スル最夥ヲ以テ倍數輜重兵之ニ蹤

ヲ以テ五分ノ三合數四千三百二十人トス之ヲ各

管鎮臺各種ノ兵員ニ應シ常備同時ニ徵募シ一々

年ヲ期トシ本年管内常備ノ缺員ヲ充タシム

但シ非常ノ缺員ヲ生シ本年補充ニテ充足セザ

ルハ前年補充ヲ以テ之ヲ充タス

補充一々年ノ徵負

歩 三千五百八十四人

騎 百二十人

砲 二百八十八人

工 百六十人

輜重 七十二人

海岸砲 九十六人

合計四千三百二十人

常備補充一ヶ年徴負ノ合數

歩 一万二千五百四十四人 内補充 三千五百八十四人

騎 二百四十人 同 百二十人

砲 千〇〇八人 同 二百八十八人

工 五百六十人 同 百六十人

輜重 百九十二人 同 七十二人

海岸砲 三百三十六人 同 九十六人

合計一万四千八百八十人

各種兵率ノ常尺 尺曲

砲兵 五尺四寸以上

海岸砲兵

騎兵

工兵 五尺三寸五分以上

輜重兵

歩兵 五尺一寸以上

各種兵率ノ定尺ニ照準シ歩兵百人ニ付テ各種兵

率ノ比較

歩 百人

騎 壹人九一三

砲 八人〇三五

工 四人四六四

輜重

壹人。五三〇

海岸砲

二人。六七八

海岸砲墩ハ目今山野砲ヲ以テ之ニ充ツ因テ其兵員ヲ除キ追漸海岸砲ヲ備付ルルニ當リ各所其定員ヲ徴ス

明治六年第一月

陸軍省

近衛兵編成并兵額

近衛兵編成

近衛兵ハ常ニ輦下ヲ護衛シ他ノ徵發ニ應スル者ニ非ス偏ニ天子ノ命令ヲ奉戴シ千軍万馬ノ中ト雖モ整々獨歩スルノ膽勇ヲ持有シ又平常ニ在テハ信義ヲ本トシ先進ヲ敬ニ後進ヲ教導シ總テ隊中ノ控ヲ守リ全國歩兵ノ模範タルヘキヲ以テ

諸兵ノ上ニ位セシノ其給俸ヲ増加ス就中此兵ハ全國共戴ノ至尊ヲ護衛スルノ兵タルヲ以テ各鎮管ノ内常備熟練兵ノ中強壯ニシテ行狀正シキ者ヲ一小隊毎ニ兵種ニ應シ若干人ヲ撰擧シタル者ヨリ編成シ奉命其日ヨリ更ニ五々弁ノ役ヲ帯ハシメ滿期ノ上ハ後備軍ノ籍ヲ免ス者ナリ

近衛兵額

近衛兵額表

平常其員ノ充足セシムルヲ以テ缺員毎ニ各鎮常備軍ヨリ撰擧シ其員ヲ充テシメ戰時ノ増加ヲ要セス

歩兵	隊數	每一隊人數	總員
二聯隊 <small>師十 四大隊</small>	八百	三千二百	

騎兵	一大隊	百五十	百五十
砲兵	二小隊	百五十	三百
工兵	一小隊	百五十	百五十
輜重兵	一隊	八十	八十
合計		三千八百八十	

鎮臺兵一付近衛ノ比較

鎮臺

近衛

歩 二萬六千八百八十人 凡八分一即 三千二百人
 騎 三百六十人 凡二分一即 百五十人
 砲 二千六百六十人 凡七分一即 三百人

工 千二百人 凡八分一即 百五十人
 輜 三百六十人 凡四分一即 八十人
 合計三萬。九百六十人 合計三千八百八十人
 近衛兵毎年撰擧ノ兵員

歩 六百四十人
 騎 三十人
 砲 六十人
 工 三十人
 輜 十六人
 合計七百七十六人
 鎮臺各種ノ兵百人。付近衛兵撰擧ノ比較
 鎮臺 近衛
 歩 百人 二人。三八

騎	百人
砲	百人
工	百人
輜	百人
陸軍省	陸軍省

明治六年第一月

六管鎮臺兵額表

隊數	平時	戰時	平時	戰時
步兵	十四聯隊	十四聯隊	六百四十	九百六十
騎兵	三大隊	三大隊	二百二十	三百六十
砲兵	十八小隊	十八小隊	二百二十	二百五十
輜重	十小隊	十小隊	二百二十	二百五十
合計	六隊	六隊	八百八十	一千五百

國軍兵額并配分表

兵種	平時	戰時	平時	戰時
步兵	十四聯隊	十四聯隊	六百四十	九百六十
騎兵	三大隊	三大隊	二百二十	三百六十
砲兵	十八小隊	十八小隊	二百二十	二百五十
輜重	十小隊	十小隊	二百二十	二百五十
合計	六隊	六隊	八百八十	一千五百

陸軍省	平時	戰時
人員	三萬五千五百六十	五萬二千三百三十

合計	平時	戰時
人員	三萬五千五百六十	五萬二千三百三十

陸軍省一掛合史官

別紙陸軍云々ノ儀御許可相成候付テ、例ノ通朱字
 鈴印ノ上御渡可申間寫早々御差出可有之其前別冊
 二御返却可有之尚此餘ノ分ハ四民論ニ關係ノ儀ニ
 付一應御談可相成候付明廿日山縣大輔參朝可有之
 此段申入候也
 陸軍省一掛合史官

陸軍省一掛合史官

武政類典

証錄

別冊徵兵令其外四冊同濟ニ付差廻申候間掛紙ノ通
 夫々削正且徵兵令ハ布告相成候間於其省上未出來
 次第早々可被差出右ニ付テハ勅諭等ハ正院ニ於
 テ上梓可相成候也 十一月廿八日 別冊原稿ハ點竄
 評ナラズ且大輔持差出別ニ點竄
 陳ノ書ナレ又十一月廿八日 陸軍省記録ニ徵
 兵令其外四冊ト有之候ハ共陸軍省記録ニ徵
 備ラズト云可考

四民論

凡ツ常備ノ兵數ヲ定ムルハ全國歲入ノ外必ス國界
 ノ廣狹防禦ノ難易及ニ國內ノ人口ニ基カサル可カ
 ラス而シテ人工中士農工商皆其職業ヲ異ニシ以テ
 老ヲ養ヒ子孫ヲ長ヌ故ニ其丁壯ノ時ニ於テ齊ク兵
 役ニ服シ國家ニ報セシムルハ有ル可カラズ方今郡縣
 ノ古ニ復シ殆ント士農ノ分工商ノ別ナク四民同視

人エ恐クハ人口ノ
謀

ノ令ヲ布キ一般兵役ニ服セシムルハ固ヨリ生ヲ此
 土ニ粟ル者ノ分ト謂フヘシ然レモ今急ニ之ヲ行
 ト欲セバ却テ兵制ノ大本治安ノ要道ヲ害スルノ患
 フラニ何ントナレハ從前ノ風習士農ト工商ノ間其
 別甚ク相隔違ス農ハ田租ヲ納メ國費ニ供シ士ハ武
 技ヲ事トシ國家ヲ護ス其分ハ甚遠キニ似テ其情甚
 タ近シ士モ耕作シテ恥ナク農モ時トシテ兵夫ニ充
 ツ之レ古ヘ農ヨリ兵ヲ募ルノ遺風今ニ存スル所ニ
 シテ又自然ノ位置然ラシムルナリ故ニ士農ハ工商
 ニ比スレバ最兵役ニ服シ易シトス工商ハ之ト異ナ
 リ其業タル概ネ市街紛華ノ地ニ住居シ筋カラ勞セ
 ス暖衣美食安居遊蕩足嶮峻ノ地ヲ踏マス身百斤ノ
 重ニ担レス豈能ク兵役ニ勝ンヤ強ラ之ヲ課スルモ

強兵ノ道ニ益ナク却テ冗員ニ属ス故ニ農ニ比スレハ最兵役ニ服シ難シトス然レトモ農ヲ募リ獨リエ高ヲ募ラサレハ四民同視ノ令ヲ踐マズ人權同一ノ法ニ違ヒ一ハ至難ノ役ニ就キ至急ノ事ニ走リ一ハ泰然トシテ其本職ヲ失ハサレハ松ナシト謂フヘカラス夫斯ノ如クナレハ或ハ上ヲ怨ミ兵ヲ厭フノ意ヲ生モ各離畔ノ心ヲ抱クニ至ラン然レトモ今俄ニ四民同視ノ實ヲ踏マレノ一般兵夫ニ役シ國家ニ服セシメント欲スト雖モ誠ニ行ヒ難キモノアリ依テ下文ニ論スルカ如ク暫ク四民ノ情實ニ注意シ四民服役ノ方法ヲ定メテ將來ノ幼年ハ四民同視ノ實ヲ踏ミ幼齡文ヲ學ビ壯年兵役ニ服シ齊シク國家ヲ護セシムルヲ肝要トス

皇族ノ事

皇族ハ皇室ヲ補佐スヘキハ固ヨリ論ヲ殊ス或ハ大位ヲモ可被為繼因ニ文部海陸學寮及ヒ工部開拓等ノ諸業迄モ普ク研究シ開化ノ先導ヲナシ玉フヘシ壯年迄モ筆閑ニ被為過諸省學科ノ證書及ヒ國家ノ用モ無之暖衣飽食時日ヲ涉ラセ候ラハ均シク國ヲ盡スルノ民ニシラ上ハ朝廷下ハ万民ヘ對セラレ甚不可然儀ニ付四民一般隊伍ニ編入シ兵威ヲ廣張レ玉ハスンハアル可カラズ然レトモ從前ノ風習機ネ深宮婦女ノ手ニ生長シ玉ヒ躰質軟弱今俄ニ兵卒ノ事業ヲ踏セラレント欲ストモ實ニ行ハレ難シトス故、今ヨリ十ヶ年ヲ猶豫シ其實ヲ踏セラレシ事ヲ要ス因ニ當年十歳ノ皇族ハ今日ヨリ國家裨益ノ目

的ヲ被為建十年ノ後ハ二十歳ノ皇族ヲ一般ニ調ヘ
萬一國ヲ盡スル民ニ均キテアラハ四民同様徴兵令
ニ照シ檢査ノ上隊伍ニ編入シ全國兵威廣張ノ首唱
トナリ五フヘキ事

華族ノ事

華族ハ祖先ヨリ國家ニ盡カレ所謂大功田トシテ累
世顯爵大封ヲ辱フス然リ而シテ版籍返上ノ後ト雖
モ尚祖先ノ餘澤ヲ蒙ラレノ族ト禄トテ賜ハル聖恩
至渥之ヲ待ツ所以ノ者モ亦至レリト云フヘシ然ラ
ハ則チ華族ノ幼年タル者ハ須ク政々汲々文部海陸
軍ノ學寮工部開拓等ノ所業迄マ普ク修業シ上ハ以
テ政化ヲ補翼シ下ハ以テ生靈ヲ保安スヘキハ固ヨ
リ其分ナリ若又壯年ニ及ハ一益ノ以テ國恩ニ報ス

ル目的ナキ者ハ殊更衆民ニ先ニシテ四民一般隊伍
ニ就ヘキ固ヨリ其處ナリ然レトモ因襲ノ久シキ生
育ノ異ナル情實行ニ難キモノアリ故ニ今ヨリ五ウ
年ヲ猶預シ其後ハ徴兵令ニ照シ其實ヲ踏マシメ
ト欲ス由テ當年十五歳ノ者ハ各個二十歳迄ニ國家
ニ報スヘキノ目的ヲ建ツヘシ最禄有テ職ナキハ素
餐ノ責免カレヘカラス況ンヤ大禄ヲ請ケ其責ナキ
ノ理ハナキコトナリ依テ本人服役ノ有無ニ係ラス
其禄ノ多寡ニ應シ禄役トシテ年々現米百石毎ニ百
兩宛ノ軍資金ヲ出シ兵備ヲ補ハシムヘキ事
但シ百石以上ノ士族アルトキニハ禄役右ニ準ス
士族率ノ事

士族率ノ兵役ニ就クハ固ヨリ其分ナリ夫一日名禄

ヲ存スレハ則チ一日其職ニ就カサルヲ得ス此故ニ
 他ノ徵兵ト違ヒ齡二十歳ノ者ハ徵兵免役規則ノ内
 本人嫡子并獨子獨孫及ヒ兄弟ノ在勤ニ係ハラズ徵
 募シ検査抽籤ノ上常備兵ニ充ク尚ホ時宜ニ依リ乃
 至二十五歳迄ノ者ハ布令ニ應ヒ其年ノ徵募ニ就ク
 可キ事

僧徒ノ事

諸寺院ノ僧徒ハ元萬民ノ葬祭ヲ引請ル者ニシテ公
 事ニ關セスト雖ヒ其葬祭教法ニ至テハ萬民ニ於テ
 功勞ナキト謂フ可クテ此ニ由テ之ヲ觀レハ公事
 ニ關ハル同一理ニシテ一統兵役ヲ免ス可レ然レモ
 二十歳迄寺主或ハ後繼トナラサル者ハ四民同様檢
 査ノ上常備軍ニ編入スヘシ依テ甫テ二十歳ニ至ル

ノ僧徒ヲ調ヘ其中後繼タルハ僧徒ハ府縣廳ヘ召
 集ノ各宗旨ニ於テ經文講義作字講釋等検査ノ上兵
 役ヲ免ス可キ事

農民ノ事

農ハ耕作シ租税ヲ納メ其餘ヲ以テ自家ヲ營ム者ナ
 リ而シテ免役規則ニ當ル者ノ外一般兵夫ニ課スル
 ト雖モ小農ハ丁壯ノ佐手ヲ失ヒ許多ノ苦情ナシト
 謂フ可カラズ依テ家産等差ヲ立テ兵役ヲ帯ハシム
 ル事

等差ノ定

一家ノ口數ヲ算シ一ケ年ノ食糧ヲ蓄フル者ヨリ以
 上ハ検査抽籤ノ上常備兵ニ充ク右備農ヲ除キ尚農
 ニ三種ノ別アリ其一ハ傭夫ヲ役シ耕作セシノ或ハ

多ク耕地ヲ有シ人ニ貸シ其賃トシテ徳米ヲ收ル
 者ヲ豪農トス其二ハ自家ノ地ヲ耕シ他人ニ賃シ借
 リセサル者ヲ常農トス其三ハ人ノ耕地ヲ借り租税
 ヲ納メ尚ホ田主ニ徳米ヲ出ス者ヲ小農トス依テ三
 農各個ノ分ニ應シ家産ヲ定ムル法左ノ如シ

其一 豪農ハ自家ノ租税ヲ除キ家入及ヒ貸地ノ徳
 米ヲ合セ之ヲ精算スヘキ事

其二 常農ハ自家ノ租税ヲ除キ家入ヲ精算スヘキ
 事

其三 小農ハ租税ヲ除キ尚ホ田主ニ徳米ヲ出シ其
 餘家入ヲ精算スヘキ事

租税ハ四公六民ノ法ニ依リ徳米ハ一段ニ付米七斗
 ト見做シ一口分ハ一ヶ年一石八斗ト定メ此目標ヲ

以テ各個其作高ニ應シ一ヶ年ノ家入ヲ算定ス尤當年
 ノ家入人口ニ適セスト雖モ米金貯蓄ノ者ハ此例ニ
 アラス且農籍中ノ者ニシテ貯蓄ノ米金ヲ貸シ其利
 ヲ收メ又ハ商賣工職ヲ専ラシ傍耕作ヲ為ス者等
 世間少カラズ斯クノ如キ者ハ作高少ニシテ家入_都
 テ倍獲メ又時々ニ増減ヲトシ家産ノ等差最立テ難
 シトス然レトモ同里ノ_月算戸長ノ調ニ從ヒ一ヶ年
 ノ家入ヲ算定スヘキ事

工商ノ事

工商ハ士農ノ如ク恒産アル者ニ非ヌ中ニ就テ商ハ
 工ニ比スレハ尚ホ定産無キ者ノ如シ得失張縮_{下上}
 變換ス之レ商賈ノ常ナリ然レ其賣買ノ大富饒ノ積
 ヲ致シ其亡ナル者ニ至リテハ子孫不授ノ家産ヲ設

クルニ至ル者アリ其他ハ商ニ於テハ外内情ヲ異ニ
 シ衆人目算ノ及ハサル所ニシテ家産ノ等差最モ立
 テ難シ然レモ各個日稼ノ上ニ付之ヲ同里衆目ヲ以
 テ概定スル時ハ一ケ年ヲ平均レ一ケ月五千金以上
 ヲ賣買出入セシ者ヲ豪商トシ五百金乃至五千金迄
 ノ者ヲ中高トシ以下ノ賣買出入セシ者ヲ下商トス
 而シテ工職ノ者概テ此下商ノ部ニ列ス又其最下列
 ニ至リテハ年奉公人年奉弟子入込其他種々雜業
 ヲリ農ニ非ス商ニ非ス又工職ニ非サル者アリ之ヲ
 概スルニ漁獵樵夫園丁輿夫車奴日傭奉公僕奴及ヒ
 絃歌見俳優ノ類教擧ス可ラス今俄ニ兵役ニ課スル
 キハ一家ノ生計又ハ終身渡世ノ道ニ離レ苦情百端
 弊害モ亦量知マヘカラス故ニ下商以下ハ此往キ五

ケ年ノ間兵役ヲ免除レ以後ハ徵兵令ニ從テ二十歳
 ニ至レハ兵役ニ就カシムヘキヲ以テ向後年奉公
 年期弟子等十九歳迄ヲ限リトスヘシ然リ而シテ豪
 高二十歳ノ者アレハ兵役ニ就カシムヘシ又自己ノ
 便宜ヲ以テ兵役ヲ免レ度者ハ規則ノ通り免役金差
 出スヘシ中高二十歳ノ者アルキハ兵役ニ課シ家計
 ニ於テ妨ナシ固ヨリ自己ノ便宜ヲ以テ兵役ヲ免レ
 度キ者ハ免役金ヲ差出スヘキ筈ト雖モ未嘗テ意ハ
 サル事ニ付家産ニ於テ障リナシト謂フ可カラス依
 テ此往キ五ケ年ノ間免役金二分ノ一ヲ出サシメ以
 テ軍費ヲ助ケシムル事

奏西徵兵畧式

來春東京鎮臺管下ノ府縣徵兵被仰付候處現今府縣下

戸籍人口ノ調モ未夕不詮儀ノ折柄丁壯調モ容易ニ
 難行届候哉モ難計就テハ疎ヨリ密ニ入り漸次ヲ以
 テ徴兵令ノ通り郡々村々ニ至ル迄徴兵使巡廻被仰
 出候ハ、府縣下戸籍人口調モ行届可申依テ來春ノ
 處ハ先ツ府縣廳迄徴兵使被差立府縣々々ニ於テハ
 當年十九歳ノ者ヲ相調ヘ徴兵免役規則ニ當リ尚ホ
 四民論ニ照シ差障無之者ヲ精シク詮議致シ高千五
 百石ニ付一人ノ見込ヲ以テ府縣石高ニ應シ來春徴
 兵使巡行ノ節府縣下召集致シ候ハ、自然不都合筋
 モ有之間敷事

但千五百石高ノ内免役規則及四民論ニ照シ差障
 無之者二人以上有之候節ハ其区内ニ於テ抽籤ノ
 上一人可差出事

管下府縣

東京府

高十五万石餘

相當徴兵百人

神奈川縣

同三十三万石餘

同二百二十人

埼玉縣

同四十八万石餘

同三百二十人

入間縣

同四十万石餘

同二百六十六人餘

足柄縣

同二十六万石餘

同百七十三人餘

静岡縣

同二十五万石餘

同百六十六人餘

山梨縣

同 二百。六人餘

同 三十一万石餘

印旛縣

同 三百。六人餘

同 四十六万石餘

新治縣

同 四百。六人餘

同 六十一万石餘

茨城縣

同 三百四十人

同 五十一万石餘

宇津宮縣

同 二百七十三人餘

同 四十一万石餘

木更津縣

同 三百四十六人餘

同 五十二万石餘

新潟縣

同 六十万石餘

群馬縣

同 四百人

同 四十四万石餘

椽木縣

同 二百九十三人餘

同 五十二万石餘

柏寄縣

同 三百四十六人餘

同 五十四万石餘

長野縣

同 三百六十人

同 四十五万石餘

相川縣

同 八十六人餘

同 十三万石餘

石高合計七百三十七万石餘

相當徵負合計九千四百七十九。七人

常備一ヶ年徴負二千百四十人
補充九百〇八人

合計 三千〇四十八人

左院答議

陸軍省ヨリ相伺候徴兵ノ制度改革見込ノ儀ニ付勅
書按及ニ各條件ノ書類トモ熟讀計議仕候處實ニ國
家ノ大典方今ノ急務ニシテ立制ノ大躰規律ノ方法
願ル其直フ得タリ蓋シ其立言ノ際猶數條ノ議ス可
キアリ因テ之ヲ論ヌル如左

徴兵大意論中ニ云人固ヨリ心カフ盡シ國家ニ報ゼ
ザルニカラス西人之ヲ稱シテ血稅ト云フト夫レ血稅
ナル者ハ貴賤貧富ノ別ナク同心戮力共ニ其國土ヲ
保ト俱ニ其人民ヲ護スルノ謂ニシテ亦自ラ其身ヲ

衛ルト同一理ナリ故ニ公上私ニ其稅ヲ賦スルニ非
ス人民亦私ニ其稅ヲ還ル可カラス而シテ其稅法モ
亦貴賤上下公平齊一ナラサル可カラス然ルニ四民
論中士族卒ノ條下ニ士族卒ノ兵役ニ就クハ固ヨリ
其分ナリ一日名祿ヲ存スレハ則一日其職ニ就カサ
ルヲ得ス故ニ他ノ徴兵ト違ヒ免役規則ノ内本人嫡
子并獨子獨孫及兄弟^弟ノ在勤ニ係ハラス徴募ス云々
トアリ是レ其稅法他ノ三民ト異ナル者ニシテ其自
カラ相矛盾スルニアラマヤ加之詔書按中上代ノ制
ニ基キ海外各國ノ式ヲ斟酌シ全國募兵ノ法ヲ設ケ
國家保護ノ^基法ヲ立ント欲ストアリ其他徴兵大意ノ
文意ヲ以テ之ヲ視ルニ既ニ士ノ常職ヲ解クノ論夕
リ是以兵ヲ四民ニ公賦スルノ所以ナリ然ハ則人民

一般血税ヲ以其國ニ報ユルハ同一ノ理ナレハ士モ亦免役ノ規則同一ニセサルヘカラス

四民論皇族ノ條

皇族ハ他日實位ヲモ可被為繼ナレハ因ヨリ海陸ノ其道其他ノ學術普ク研究被為在度ハ勿論ナリト雖モ四民一般隊伍ニ隔入スルノ理ナカルヘシ教導團ニ入給ヒ卒伍ノ事業迄モ被為學時トシラハ諸省諸士官ノ事務ヲモ被試ラ可ナル而已サレバ其實行詎リ十年ヲ俟ツトセン

同華族ノ條

本人服役ノ外軍資金差出ス可シトアリ是レ四民同一ノ理ニアラス如何トナレハ既ニ定例ノ血税アル上ニ其他尙軍資ヲ補フノ理ナカル可レ勿論代人ノ

贖高及免役規則等總テ一例トナシラ可ナリ華族且ツ如斯ナレハ百石以上ノ士族モ亦同斷タルヘシ既ニ四民同一タル上ハ之ヲ賦スルノ期限モ亦五ヶ年ヲ恕スルノ理ナカルヘシ

同僧徒ノ條

僧徒ト雖モ同一斯ノ民ニシテ血税モ亦之ヲ同一ニセサルヘカラス故ニ本人二十歳ニ及ビ既ニ一寺ノ主トナル者耳免役セシメラ可ナリ但シ府縣廳へ召集シ道術検査ノ事ハ事實ニ於テ行ハル可カラサルニ似タリ且僧徒既ニ如此神官亦此例ヲ違ル可カラス

同農民ノ條

血税ヲ以テ豪農常農小農ノ別ヲ立ルハ貴賤同一ノ

理。及セリ貧富ハ其人ノ幸不幸ト事業ノ勉勵懶惰
ニ係ル他人ノ敢テ之ヲ與奪スルニ非ス且免役規則
ニ於テ考フレハ小農ト雖モ亦其生計ヲ害スルニ至
ラス故ニ代人料免役規則モ亦同一例ニ在ラ可ナリ
華士卒族既ニ貧富貴賤ノ別アリト雖モ血稅ノ例ハ
一視スルニ非スヤ農豈獨ル其別ヲ立ニ

同工商ノ條

人躰ノ強弱ハ其生質ト其平常ノ慣習ト、依ル工商
管ニ軟弱ニシテ士農豈獨強壯ナラニヤ況士ニシテ
握作力量或ハ工商ニ不及モノアリ血稅己ニ同一理
ナレハ其之ヲ賦スルノ法亦同一ナラサル可カラス
故ニ漫然五ヶ年ヲ恕スルノ理ナク而テ之ヲ處スル
モ於彼利益アルト無カラニ又農ヲ視ルト同ク其貧

富亦豪中小ヲ差別スルノ理ナカルヘレ

徵兵令踏言中

賦兵ノ制躰ニ變スル上ハ賑恤金積金ノ法ヲ廢スル
ノ文意ニ似タリ然レモ此一則ハ舊ノ如ク存レテ可
ナルヘレ

同第一章二條ヨリ六條ニ至ル

議長議官議員ノ目アリ蓋シ西語ノ意ヲ寫スモノナ
ラニ然レモ官名既ニ此稱アレハ宜シク其名稱ヲ改
ムヘシ

同第三章三條但書

等外ノモノト雖モ奉職ノ理ハ素ヨリ同一ナレハ免
役條下ニ置ラ然レヘシ

同章五條

私塾ノ生徒ト雖モ專門ノ學科其師ノ免許書アル者
ハ是亦免役ニテ可ナルヘシ如何トナレハ其師タル
者文部ノ免狀アラサレハ私塾ト雖モ其門戸ヲ張ル
能ハサレハ也

同章十條但書

答以上ノ刑ニテハ兵役ヲ免レン為ノ或ハ刑名ヲ犯
スノ弊ナシト言フ可カラズ故ニ徒以上ノ刑ヲ受ル
者免役ニテ可ナラン

一課中討議仕候條右ノ如シ其他勅書按布告按徴兵
大意等其外文字ノ加除ハ本紙掛紙ノ通相成可然被
存候へ共右ハ皇國兵制ノ一大變革四民ノ名稱廢除
ノ基本ニシテ人心ノ向背ニ關スル事亦細少ナラサ
レハ一朝輕易ニ之ヲ議定スヘキニアラズ願ハ尙全

院ノ熟議ヲ經テ結シ後弊ナキヲ期シ度事ト存候
月廿六日